
ポーとぼく

ノダメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボーとぼく

【著者名】

ノダメ

【あらすじ】

少年は、絵本の主人公と出会つ。そして、光に包まれ本の中へ

第一話・本の中？

星の瞬くその町にひときわ目立つ怒り声は、町の一角にあるさびついた赤い屋根の家に住んでいる、マルク家の父親トンスの声です。「どうしておまえは、ちゃんと学校にいかないんだ。町の子はみんな行っているのに。」「

町の人々は、いつものことだとおもい、騒ぐこともありませんでした。

「父さんには僕の気持ちなんてわからなによ。わからうともしないくせに。」

トンスの息子ミックは、泣きながら怒りました。ミックは、町の子供たちからいじめられていきました。

ミックは、自分の部屋へ戻りベッドの上においてあった本を取りました。

本の題名は、「マシュマロ星人ポーの冒險」。ミックはこの本が大好きで、とくに主人公ポーが愉快な仲間たちとのしそうに冒險しているところに、自分もいつかその仲間になりたいと夢を抱いていました。ミックは本を抱きしめました。「僕にはポーがいればいいんだもん。だって、みんな僕のこといじめるんだ。」

その時ドアから母親マリアが入ってきてミックをやさしくだきしました。

「無理して学校にいかなくてもいいのよ。ただ父さんは、あなたを心配して言っていることを忘れないで。おやすみ。」

マリアは、ミックに優しくキスをすると一いつ口ひと笑顔を見せて部屋を出て行つた。

ミックが眠りにつき時計の針が真夜中の十一時を指した頃、突風が吹きミックの部屋の窓ガガバッとあきました。部屋は星の光が眩いばかりに照らしベッドの上の本が風でピラピラと音をたてていました

た。すると、

「ポー？」

本の中からなにやら白い生き物ができました。

「ポウポポ」

寝ているミックに気が付くと氣に入つたのか生き物は、ミックを担いで本の中へスーっとはいつていきました。

起きたミックが見た風景は、虹色のふかふかベッドに色鮮やかな形の変な料理、そして笑顔で見つめている白い生き物でした。どうやらここは、生き物の家のようである。

「君は、もしかしてマシユマロ人のポー？」

ミックは、驚きの気持ちを抑えました。

「ポポ」ポーは、うなずくと喜びのあまりミックに抱きつきました。するとミックは、あまりのできごとに失神してしまいました。「ポポ？」硬直したミックに気付いたポーは、心配になつたのかミックを抱いで外にでました。

外の世界は、なんとも不思議な光景でした。

空の半分は、夜の月と星がみえていてあの半分は、サンサンと輝く太陽と雲ひとつない青空がみえました。ポーの家は、どうやら町の中にあるらしく他の家も色とりどりの形です。中には、透明で、ひょうたんの形、家具まで透明なので中がまる見えです。町の住人まで色とりどりでいろんな顔の形をしています。

ポーは、三角つぼの形の家にはいつていきました。看板には、絵が書いてありどうやらここは、病院のようです。病院の中には、ぶきみな眼鏡と長く伸びた白い口ひげのはえた老人が立っていました。「ポーじゃねえか。どうしたんだ血相変えて。どうやらなにか抱いでいるみたいだが？病人ならみせてみろ。」

老人は、この町にはめずらしく人間で、どうやら医者のようです。ポーは、病院の中のベッドにミックを寝かせました。ミックはまだ失神しました。

「おいポー、この子は、人間の子じゃないかどうしてここに？」

医者は、ミックの容態をみながらポーに聞きました。

「ポ・ポ・ポ・ポー」

ポーは、うれしそうに答えました。

「なに一気に入つたからつれてきたー。」

医者がびっくりして大声をあげるとその声でミックは、目をさました。

「起してしまったな、すまんすまん。私は、この町の医者ポツツじゃ。よろしくな。失神したばかりじゃからまだ横になつとれ。」
ポツツは、あやまりながらやさしく笑つた。ミックは、何か言いたそうにしていると、「ここは、絵本のなかじゃよ。君がここに来たのはポーが気に入つて君をここにつれてきてしまつたからじゃ。この町は、スワイーツポップという町で人間は、わし一人じゃ。これで、満足かな。」

ポツツは、ミックの考へていたことを全部といつてくれた。

「ん? 今度は、なんでわかるんだとおもつたじやろ? わかるんじゃよ。昔、わしがここにきたときも、そつおもつたからの。」

ポツツは、満足そうにニヤつと笑つた。ポーも、わかつているのかわからぬが笑つていた。

ミックは、なんだかわけわからず考へ込んでいた。

すると、病院の入り口からいろいろな生物たちが、がやがやと話しながらきた。

「新入りがきたって言うからよみんなつれて見に着たただよ。」

マーブルキャンディ人がわくわく顔をうかべていた。

「この子は、まだ病人じゃ。そつとしといてやれ」

ポツツは怒りました。

ポーは、ミックを心配そうに抱き起こして頭をなでていた。

「ぼくは、もう大丈夫です。ポーも大丈夫だから心配しないで。」

ミックは、やつと心の整理ができたのか、なでていたポーの手を止めました。ポーは、まだ心配そうなまなざしで見つめていました。

「大丈夫だから。」

ミックのその言葉にポーもポツツも安心しました。

「大丈夫そうだな。それなら今日は、歓迎会だ！言いわされたけど俺の名前は、スカッチ、お前の名前は？」

スカッチは、マーブルでかわいい格好をしているのにワイルドだった。

「ぼくはミックです。歓迎会つてぼくの？」ミックは、不思議な気持ちになつた。

「当たり前だろ他に誰もいないんだから。新しい友達ができれば歓迎するのがあたりまえだ。」

スカッチは、ミックの質問が変に思つたのか笑い出した。

「お前、おもしろいやつだな気に入つたよ。じゃあおれは、歓迎会の準備をするからいくぞ、またあとで迎えにくるからよ。」

スカッチは、口笛をふきながら町の人を手招きして病院をでていった。

「そう不思議な顔をしなさんな。スカッチも町の住人も誰か繰れば必ず受け入れてくれる。ここは、そういう町なんじやよ。おまえさんがそんな顔しているとポーも落ち着かんよ。」

ポツツは、クスリと笑つた。ミックがポーを見るとポーは、心配そうにミックをみつめていた。

ポーの心配をよそにミックの心は、逃げ出したい思いでいっぱいになつていた。ミックは、小さい頃から歓迎会のよう催しものは、友達がいなかつたために入つていけないので苦手だったのです。

「ぼくちょっと外を散歩してくる。」

ミックは、みんなに黙つたまま家に帰ろうとした。もちろん帰り方などわからぬ。でも、なんとかなると思つていた。

「歓迎会は、すぐあるからなあまり遠くにはいかないようにな。」

ポツツは、何も疑うことなく送り出してくれた。ミックが病院のそとでるとポーが心配そうについてきました。

すると、

「ポー、ミックを一人にしてやれ、一人になりたい時もあるんだ。」

ポツツが病院の中からポーに声をかけた。ポーは、それを聞いて「ポポ」

残念そうに肩をおとして病院の中に入つていった。

病院を後にしたミックは、町の中をどこにいくかもわからず歩いていた。その時、いろんな生物に声をかけられた。

「やあ、君がミックだね。歓迎会は、たのしみだね」

とか

「ここにちは、元気なさそうね、歓迎会がはじまれば元気になるわ。またあとでね。」

とかこの町は、本当にミックを歓迎しているんだとミックは思った。同時にもっとこの町のことが知りたくなつた。ミックは、来た道を戻ろうと思つて後ろに向き直すと自分の来た道がわからなくなつていた。

「迷子になっちゃつた。ここは、どこ?」

ミックは、「またみんなに会いたい。」そう想つたら涙がでてきた。ミックは、足をとめて泣きながら空を見るとさつきまで輝いていた星から小さな妖精がでてきて星にカーテンを掛けっていた。他の星にもそれぞれ妖精が住んでいるのか、カーテンをかけていた。月を見ると美しい月の女神アフロディーテがベッドで眠っているのが見えた。

月は、女神が寝ているせいか光が弱かつた。

隣の空では、誰がかけたのか太陽にへんてこな布巾がかかっていた。ミックは、涙がとまるほどびっくりしてしまいました。この町は、人も建物も全部変だけど空まで変だと思わなかつたのでした。

そういうしているうちに

「おーい、おーい

「ポー ポー」

「ミックカードだー」

ミックを探すポーたちの声がきこえきました。

ミックが辺りを見回すと遠くの方にポーたちがいた。ミックは、全

速力でポー達のところへ涙をいっぱいいためて走りました。

「なにしてんだよ、みんな探してたんだぞ。

勝手に遠くに行くな。」

スカッチは、涙をながらミックを殴りその手は、震えていました。

そして、強くミックを抱き締めたのです。「こめんなさい。」

ミックは、スカッチの腕の中で泣きながら小さな声で言いました。

「何より見つかってよかったです。さあみんなで村に帰ろう」

ポツツは、ミックの頭をやさしくなでました。

「ポポポポー」

ポーは、ミックをスカッチの腕から離すと誇らしげに肩車をしました。

ミックは、止まっていた涙がまた溢れてくれました。みんなと一緒にいたいと心のそこからそう思つたのでした。

「おい。起きる、ミック。村についたぞ」

スカッチの起こす声にミックは、目をこすりながら起きました。どうやらポーの肩の上で泣きつかれて寝てしまつたらしい。周りを見ると村の人たちにミックは、囮まれていた。

「心配したぞ」

「どこに行つていたの。」

「怪我はしていない?」

「大丈夫?」

村の人たちは、ミックに声をかけて肩をポンとたたいたり、頭をなでたりした。

ミックは、その一つ一つの言葉に胸がいっぱいになつた。

「さあ歓迎会をはじめるぞ」

スカッチが大きな声を合図に空にドーンと大きな花火があげました。

その大きな音に寝ていた星の妖精と月の女神は、目を覚ました。星の妖精たちは、歓迎会を楽しむように星を揺らしていた。月の女

神は、優しいまなざしで田の窓辺からじゅうりを見つめていました。

第2話女神たち（前書き）

本の中へきてしまったミックは、歓迎会で一人の女神にであります。なんやら事件が・・・

第2話女神たち

歓迎会は、それはそれはなんともおかしなものだつた。

「ほれ、これ飲んでみな。」

スカツチがなにやら変なものをもつてきた。コップのなかを見ると天の川がみました。

よく「星空ビールだうまいぞ。ただし酔つても体に悪くない、最高だ。」

スカツチは、グビグビ飲んでいるとボカつと杖で叩かれました。

「体に悪くないからつて酔つていいわけあるか馬鹿者が。」

ポツツは、杖をふりあげて叩くのでスカツチは、ビールを飲みながら陽気に逃げています。

まるで、泥棒と追いかける警察官みたいです。

ミックはおながが、痛くなるくらい笑いました。そして、ミックの笑う姿にポーは、

「ポポポー ポポポ」

歌いながら踊りだしました。

その光景に、スカツチや街のみんなも踊りました。

踊つて いるうちにみんなは、円になつた。

その時、円の中心に突然、炎が降つてきた。

みんな、その炎に腰を抜かした。

酔いつぶれたスカツチも我に返つて いた。

炎は、やがてメラメラと音をたてながらかたちを変え、やがて太陽の女神ジャンヌが現れた。

見物していた星やアフロディティーたちは急に、カーテンを閉ざした。

ジャンヌは、赤いバラのように美しくもちからずよい感じの女神でそのドレスは、真つ赤なルビーのような炎がメラメラと怒りを表す

かのようだつた。

「つるさい。人が寝てるときは、静かにしなさい。だいたいあんな変な布を私の星にかけないでくれる。私の星が汚れるわ。」

メラメラと怒り出すジャンヌにスカッチは小さな声で
「つるさいのは、そつちだ。静かにしても起こるし歓迎会を静かにやるほうがむりなんだよ。」

その声にジャンヌは、気がつきました。

「スカッチ、なにがあるならいいなさい。」

するとスカッチが何か言おうとしたその時、

「 ポポポー 」

ポーがジャンヌにバシャッと水をかけたのです。

その水は、すぐに煙となり蒸発してしまいました。

「水をかけないで。ポー、やめなさい。」

そういうて逃げるよう炎に形を変えて太陽へと帰つていきました。

第2話女神たち（後書き）

これからまだまだいろいろあるのでおたのしみに！

第3話ジャンヌの復讐（前書き）

・ 村から逃げたジャンヌは、怒りがおさまらず復讐をくわだてるが・・

第3話 ジャンヌの復讐

太陽へと、帰ったジャンヌは怒りがおさまらず、太陽の炎をメラメラと燃やしポップ村を熱く照らした。

布から太陽の光が漏れてやがて布は、熱せにまけて溶けていきました。

「ポップ村のやつらめ、蒸し焼きにしてくれるわ」

ジャンヌは、鼻をツンとたてると太陽から村の様子をうかがっていました。

ミックと村の人々は、楽しそのあまりどんどんあがる温度に気付かず、踊りや歌を楽しみました。その間、お菓子でできたかわいらしい形の家はポタポタと音をたてながら溶けていきました。

「なんか、熱い。」

だらだらにかいた汗を拭きながら、ミックは辺りを見回しました。

気付くと村の人々は、ポップ以外溶けて小さくなっていたり、こんがり狐色に焼けていて良い香をかぐわせいたりしていました。

「まあいーみんな、日陰に非難するんだ溶けちまうぞ。」

ポップは、小さくなつた村人たちを日陰に非難をせました。ポーは、なにやら口からマシュマロをいっぴだしています。ビリやーテントをつくるところのようです。

ミックも、マシュマロテント作りを手伝いました。

やがて大きなマシュマロテントが完成するとポーは、安心して気が抜けたのか酸欠をおこして皿をぐるぐる回しながら倒れてしましました。

「よくやつたな。ポー、ミック。偉いぞ。」

ポツツはやさしく笑い、ポーをテントの中に寝かせました。村の人々とミックもテントの中へ非難しながらポーの作ったマシュマロテントの焼ける甘い香をたのしみました。

第3話 ジャンヌの復讐（後書き）

まだまだ修業の身です。評価と感想をできたらおねがいします。

第4話 奇跡の水（前書き）

復讐に燃えたジャンヌは、村を太陽で照らしつづけた

第4話 奇跡の水

やがてほつとしているのもつかぬま、甘い香はにがみのあるこげた匂いへとかわりました。

マシユマロテントはやがて焦げあとからボツと火がつき、そして炎となつて非難していたミックたちを襲いました。

ポツツとミックは、荒々しい炎の中、小さくなつた村の人々を抱えてテントの外へと非難しました。

「これで全部非難できたか？」

ポツツは、ミックに確認するとミックは、ザッパーンと水をあびた

「まだポーが中にいる助けにいつてくる」

ポツツは、ミックを止めようとしたがミックは、炎の舞うテントの中に入つていつてしまつた。

そのころジャンヌは、太陽から町を見て嘲笑つていた。

「いいきみ。一人とも私の美しい炎に焼かれて死んでしまえばいいわ。」

ポツツは、祈りました。

「どうか一人を助けてください。奇跡よおこつてくれ。」

その時、大量の水がザッパーンとマシユマロテントと太陽にふりかつたのです。

ポツツは、あまりの急な出来事にビックリして腰がぬけてしまいました。水は、湯気をたてて蒸発しながらも太陽に浴びせつけ太陽

は、ジャンヌを守るように炎を強めた。

水と火の戦いがはじまつた。

水のおかげでテントからずぶ濡れになつたミックとちょっと焦げたポーがでてきた。

そして二人の前に美しい木々のざわめきを奏でる緑のドレスを着た大地の女神があらわれました。

「手当てをしてあげます。怪我人をこちらへ」

大地の女神は、手に光をやどすとその光をミックたちにふりまきました。

するとみるとみんな火傷はなおり、疲れ切つていつたのにハキハキ元気になりました。

そしてつぎに大地の女神は、木々を生やして日陰を作つてくれました。

第4話 奇跡の水（後書き）

読んでくれた方ありがとうございます。

第5話 別れ（前書き）

水と火の戦いは、どちらが勝つか？

第5話 別れ

数時間の時が流れ、水と太陽の戦いはまだ、続いていました。大地の女神は、心配そうに見つめていました。

「あれは？」

ポツツは水を指しました。

滝のように流れる水の中心に女神が見えました。水の女神セレーヌです。

「いいかげんにしなさい。」

セレーヌの一言でジャンヌは、太陽の火をとめました。

「そんなに怒らなくてもいいじゃない。帰えればいいんでしょ。」

ジャンヌは、太陽へ逃げるように帰っていました。セレーヌもジャンヌの後ろ姿を見届けると水に溶け込むように消えてきました。

「やはりジャンヌは、セレーヌが怖いのね。

みんな、もう大丈夫よ。」

大地の女神の声にみんな飛び跳ねて喜びました。

ミックもポーもよひこんでいると、ミックの体が透明に輝きだしたのです。

「元、居るべきところに帰る時間がやつてきたみたいですね。」

大地の女神がそうミックに告げるといきは、黙つてうなずき田に

涙をいっぱいためながら
「ここに来れてよかったです。みんな、さよなら」。

そして最後にミックは、ポッシやポーと抱き合ひつと泡のよつに消えていきました。

家に戻ったミックは、びっくりしました。全部夢だったのだと思いました。そして、すぐに絵本を開きました。そこには、ポーやみんなと一緒にいる幸せそうな自分の姿が描かっていました。

終

第5話 別れ（後書き）

最終話です。ありがとうございました。なつとくいかなかつたらす
いません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7388a/>

ポーとぼく

2010年10月21日02時39分発行